

○例えば「スターボックス」例えば「タリーズコーヒー」そんなコーヒーショップ。

三つのテーブル。共に椅子は二つ。

スーツ姿の女性・野上がやってくる。その手にはタンブラー、そして無数の角二封筒。

入口から一番奥のテーブルに席を取ると、彼女は首から下げていたパスケースを外し、タンブラーを口に運び軽く一口。そして一番上の封筒から中身を取り出し、それに目を走らせる。と、同時にジャケットの内ポケットからペンを取り出す。

野上が見ている物。それには小さな写真が貼ってある。履歴書である。彼女は求人に応募してきた書類のチェックしようとしている。

野上「ふん」

と、気の入っていない音を小さく発して、最初の書類を元の封筒に納める。そして、その封筒にペンで何かを書いていく。それを空いている椅子の上に放り投げるように置いて、タンブラーを一口。次の封筒を取り出す。

野上「ふん」

次は一目見るなり、小さく発し、最初の物と同じようにして椅子の上へ。次を取り出す。

それまでの封筒は白いものであったが、それは茶封筒。野上は中身を確認することなく、ペンを走らせ、椅子の上へ。そして、また次。

野上「ふん、ふん」

少し時間をかけ見た後で、また気の入っていない音を小さく発して、同じように封筒に何かを書く。しかし、今度は椅子ではなくテーブルの上にそれを置く。同時に、野上の携帯が鳴る。

野上、席に着いたままそれに出る。

野上「はい、野上です。お疲れ様。今？ちよつとコーヒーを。会社の美味しくないし、落ち着かないから。で、なに？ハローワークから？なに？ああ、そうかそうか、まだ停止してなかったわ。で、すぐ連絡ほしいって？そう。それじゃ、今からするから番号と担当者教えて」

と、椅子に置いた茶封筒を手にして、そこにメモを取り始める。

野上「わかった。ありがと」

と、電話を切り、タンブラーを一口。

続いてメモした番号に電話をかけようとするが、その時ジーンズにジャケットを羽織った姿の男・柳元がやって来る。彼はミディアムサイズの紙コップを手に、数冊の雑誌を脇に抱え、一番手前の席に腰を降ろす。それをチラリと見て、野上は携帯電話をダイヤルする。

野上「お世話になります。私、株式会社Sの野上と申しますが、雨宮さんお願いできますか？」

そこで電話は保留になり、野上は茶封筒を椅子に戻し、次の封筒を手にして中身を出した。

野上「もしもし。株式会社Sの野上です。お電話頂いたと言うことで。ええ、ええ、そうですね。本当に多くの応募がありまして、まだ書類選考中で。縁あって応募をして来て下さったので、丁寧に見ないと……見るだけでも大変です。応募ですか？（やや間があつて）ええ、大丈夫ですよ。ただ、そろそろ考えていますので、今日明日中に書類を送ってもらえるようにお伝え願えますか？ええ、お願いします。それでは」

と、電話を切る野上。タンブラーを口には運びながら、目の前の封筒を椅子に置く。

野上「丁寧に、丁寧に」

その電話の間、柳元はコーヒーを飲むわけでもなく、雑誌を見るわけでもなく、ただそこに座っていたが、視線は遠くを見たままでもうやくコーヒーを口に運ぶ。そして、大きく一つ息を吐く。

野上「ふん」

と、次の封筒を椅子に。

野上「ふん、ふん」

と、次の封筒をテーブルに。それをランダムに繰り返す。

しばらくして、スーツ姿（ノーネクタイ）の男・原嶋がやって来る。一番小さいサイズの紙コップとファイリングケースを持って、真ん中のテーブルに着く。そして、コーヒーに砂糖を2本とクリームを一つ入れて一口飲んで、ジャケットのポケットから煙草を取り出す。しかし、探してはみるがテーブルにもその周りにも灰皿は見当たらない。

その姿に気付いた柳元が声を掛ける。

柳元 「ここ、禁煙ですよ」

原嶋 「え？」

柳元 「キンエン」

原嶋 「あっ、そうなんですか。そうですか。初めてで、この店」

と、煙草をジャケットにしまう。

柳元 「このチェーン店はどこも全席禁煙ですよ」

原嶋 「そうですか。初めてで」

柳元 「そうでしたか」

原嶋 「注文するにもひと苦勞でしたよ。メニューに『ホットコーヒー』って書いてなくて（と苦笑いをする）」

柳元 「（少し笑って） そうですね」

原嶋 「サイズもよく分からなくて。『ショート』って言われても『短い』としか思えないですよ。短いコーヒー。まあ、少し考えれば分かるんでしょうけど、とっさには。なんでもかんでも若者向け。我々世代にはちよつと……」

柳元 「ですね」

コーヒーを飲む二人。

原嶋 「（独り言のように） コーヒーと煙草。その相性がいいいんですがね」

柳元 「わかりますよ」

原嶋 「え？」

柳元 「私も五年くらいまでは吸っていましてね」

原嶋 「どれくらい？」

柳元 「一日二箱は」

原嶋 「スパッと止められました？」

柳元 「これが意外と苦勞なくて。禁煙パッチあるでしょ。あれを使って止めたんですよ」

原嶋 「そうですかあ。私も禁煙パッチ、試みましたが……二週間ちよつとで挫折でした（と苦笑いをする）」

柳元 「もったいない」

原嶋 「え？」

柳元 「それ乗り越えれば、楽になったのに。禁煙は三週目が辛いんですよ」

原嶋 「そうなんですか？」

柳元 「ニコチンが切れ始めて禁断症状が最初に辛くなるのが三日目。それを乗

り越えると、三週間。次が三カ月」

原嶋「三」

柳元「そうなんですよ。三日、三週、三か月、なんですよ。その一日二日を我慢すれば成功した可能性が高かった」

原嶋「そうですね」

柳元「ただパッチ貼っていれば、そこからニコチンが入りますから禁断症状はそんなに辛くないはずです。実際のところは本当に止めたいと思っただけじゃありません？『ちょっと試しにパッチ貼ってみるか』じゃ、煙草は止められないですよ」

原嶋「そうですね。どうしても、とは思ってなかったですね（と苦笑いをする）」

柳元「そうですね」

原嶋「お恥ずかしい」

柳元「（いえいえ、と手でやって）言ってみれば、煙草をやれるって言うのも健康であればこそ。ですから」

原嶋「そうですね」

柳元「そうですね」

原嶋「……もしかして、止められたのって」

柳元「（いえいえ、と手でやって）私の場合は、孫です」

原嶋「マゴ？」

柳元「煙草臭いって孫が近寄らなくて、それで」

原嶋「（驚いて）お孫さんがいらっしゃるんですか？」

柳元「ええ、三歳の男の子です」

原嶋「そうですね」

柳元「46歳で“おじいちゃん”。恥ずかしいやら、嬉しいやら……びっくりでしたよ」

原嶋「いやいや、羨ましい。うちのは恋人の気配すらないですから。付き合い合っている人がいるなんて話は一度も聞いたことがない」

柳元「知らぬは親ばかりなりってこともありますよ。うちがそうでした。こっちにしてみたら青天の霹靂ってやつで。『結婚したい人がいる』『子供が出来た』って。頭真っ白になりましたよ。」

原嶋「出来ちゃった婚……あつ、失礼」

柳元「（いえいえ、と手でやって）実際そうですね。でも、今じゃ『授かり婚』って言うらしいですね」

原嶋「そうなんですか」

柳元「ええ、そうらしいですよ。『授かり婚』そこに『順番逆だろ』なんて感覚生まれないですよ。上手い事言うが、なんでもかんでも語感を柔らかくして誤魔化す。表面だけ取り繕ったって……ねえ」

と、その時、原嶋の携帯になる。

原嶋「（携帯を手にして）失礼」

と、席を立ち、店の隅に移動して電話に出る。

スーツ姿の女・美村がタンブラーを手に現れる。首から野上と同じパスを下げている。

美村「お疲れ様です」

と、野上のテーブルの脇に立つ。

野上「あっ、お疲れ」

と、椅子の封筒をテーブルのそれに十字になるように重ねる。

野上「用事？」

美村「（座りながら）ちょっと息抜きに（タンブラーを口に運び）ふう。生き返る。そうだ。電話してもらえました？ハローワーク」

野上「また応募だって。それより、外して」

美村「え？」

野上「外して」

美村「席ですか？」

野上「パス」

美村「はい？」

野上「パス。外しなさい。会社を出たら、外す」

美村「は、はい」

と、パスを外す。

美村「応募、まだ来るんですか？採用枠一つに何通来るんですかねえ」

野上「32通目。よし、終わり」

と、最後の封筒をその山に重ねる。

美村「野上さん。ここでやってたんですか？マズくないですか？」

野上「何が？」

美村「履歴書は個人情報でしょ？社外に持ち出すのヤバくないですか？ヤバいでしょ？」

野上「……」

美村「ですよ」

野上「会社のデスクでやっている、集中できないから。はいこれ」

と、美村に封筒の束を差し出す野上。

美村「（それを受け取り）……課長に？」

野上「封筒に○が書いてあるのだけね。×が書いてあるのは応募者に返却して。

『厳正なる選考の結果、今回はご希望には添う事はできませんでした』って」

美村「課長に見せないんですか？」

野上「○が付いている方だけ」

美村「……」

野上「×の方の中見ればわかるよ」

美村、言われた通りに封筒の中を見る。

野上と美村の会話の間、原嶋は終始「はい。はい」といった感じで頭を小さく何度も下げながらずっと電話をしていた。

原嶋「わかりました。わざわざありがとうございます。失礼いたします」

と、電話を切る。そして、席へと戻る。

原嶋「どうも（柳元に小さく頭を下げる）」

柳元「（いえいえ、と手でやって）お仕事ですか？」

原嶋「えっ」

柳元「電話。お仕事？」

原嶋「いえ、ああ、まあ……」

柳元「……」

原嶋「実は今、求職活動中でして……」

柳元「求職……そうでしたか」

原嶋「で、今のはハローワークから。ここに来る前に紹介してもらった会社から『急ぎ書類を送ってください』と」

柳元「そうですか」

原嶋「……想像していたよりもずっと厳しいですね。ニュースで見聞きするよりもずっと厳しいですよ。もう半年……7ヶ月経ちます」

柳元「仕事の話と言えば、仕事の話ですね」

原嶋「え？」

柳元「電話」

原嶋「そうですね（と苦笑いをする）」

コーヒーを飲む二人。

原嶋、手にしていたファイリングケースから書類の束を取り出す。求人票だ。そこには赤い大きな×印が見える。

原嶋「いくつ受けたかも分からない位です。みんなダメでした。ハローワーク行って、探して、紹介状貰って、書類書いて、送って、『厳正なる選考の結果、今回はご希望には添う事はできませんでした』って返ってくる。その繰り返し。面接してもらえない。お恥かしい」

柳元「（コーヒーを一口飲んで）ちょっと、見せてもらえないですか？」

原嶋「え？」

原嶋の隣の席に動く柳元。

柳元「その求人票、見せてもらえないですか？」

原嶋「（やや間があって）どうそ」

と、求人票を渡す。それを受け取り、目を落とす柳元。

美村「野上さん、これって」

と、封筒をテーブルに置く。

野上「わかったでしょ？」

美村「いいんですか？」

野上「なにが？」

美村「明らかにこれって……」

野上「厳正なる選考の結果ってやつよ」

と、今度は付きつけるようにして、封筒を美村に渡す。

柳元「そうですね。面接は厳しいですね」

原嶋「え？」

柳元「ここにある求人、ほとんどが若い人対象のものですからね」

原嶋「え？」

柳元「30歳以下ですかね。よくて30代ってところですね」

と、求人票を原嶋に返す。

原嶋「そんなことはどこにも……」

柳元「書いてないですよ。書けないですから。『募集・採用における年齢制限の禁止』ってやつです。2007年に雇用対策法が改正されてね。『事業主

は労働者の募集及び採用について、年齢に関わりなく均等な機会を与えなければならぬ』ってことになったんですよ。ですから、求人情報を出す時に、何歳までとか、応募資格欄に書けないんですよ」

原嶋「……」

柳元は自分がいたテーブルに置いたままの雑誌に目をやる。それにつられる原嶋。

野上「意外とまじめに考えるんだ」

と、ペンをポケットにしまいタンブラーを口元へ。

美村「まじめについて、そう言うわけじゃないですけど。私も中途採用ですから」

野上「辛さがわかるってこと？」

美村「ハローワーク行って、探して、紹介状貰って、書類書いて、送って。応募一つするにも手間です。もちろん、ラクして仕事探すなんて思ってたんですけど……これじゃ、辛いですよ」

野上「美村」

美村「はい？」

野上「そう思うなら、今の仕事を頑張りなさい。二度と（美村の抱えている封筒を軽く叩いて）送る立場にならない様に」

美村「……」

野上「歳なんて、あつという間に取っちゃうよ」

テーブルの雑誌を持ってくる柳元。

原嶋「（雑誌を指さして）もしかして、あなたも？」

柳元「いえ。私はこういう雑誌を作っている側でして」

原嶋「という……出版社の方？」

柳元「いえ。そうではなくて（と、名刺を取り出して）こういう者です」

原嶋「頂戴します。（と、名刺を受取り）『株式会社アドシン』の柳元さん」

柳元「広告代理店ですよ。メイン業務じゃないですが、クライアントの求人広告とかの面倒も見ていましてね。求人雑誌の誌面原稿とかも作るんですよ」

原嶋「なるほど……」

柳元「まあ、市場調査っていうんですかね。時々こうやっているんな求人見るんですよ」

原嶋「なるほど……」



柳元「先ほどの話ですけど、昔は堂々と『30歳まで』とか企業の希望を書けた。差別うんぬんって話を除けば、わかりやすかった。求めている人材を的確に書けた。でも今は違う。書けない。でも、書けないからと言って、企業側が採用に関して年齢的な基準を持っていないってわけじゃないんですよ。明確には書いていない。それだけなんです」

原嶋「明確には？」

柳元「（頷いて、雑誌を開いて原嶋に見せる）例えばこの求人。『フアクトリースタッフ（軽作業）』って書いてあります。条件は『未経験者歓迎』としか書いてない。でも、ここに写真があります。今働いているスタッフでしょうね。3人いますけど、どう思います？」

原嶋「どうって？」

柳元「年齢どれくらいですかね？」

原嶋「（写真をじつと見て）20代……ですかね」

柳元「でしょうね。それに、みなさん女性」

原嶋「ですね」

柳元「そういう事です」

原嶋「え？」

柳元「そういう事です」

原嶋「ええ」

柳元「こちらの求人はわかりやすい。『企画営業』で、条件は『要普通免許（AT限定可）』写真は会社の外観ですが、ここに書いてあるコピー」

原嶋「『20代30代のスタッフ活躍中！』」

柳元「これはあくまで『現状の会社の説明』という逃げ道ですね。でも明らかな年齢制限ですよ。20代30代中心の職場でそれ以上の年齢のスタッフを雇うのであれば、それはキャリア採用です。こういう一般的な雑誌には掲載しません」

原嶋「……」

柳元「うちの社でもこうやって書きますけど、正直なところ気分がいいものじゃない。騙してみたいだね」

原嶋「（手元の求人票を見て）これもそうなんですか？『未経験でも先輩スタッフが丁寧に指導します』」

柳元「これは必ずしもそうとは限らないと思いますが、可能性はあります。今のスタッフの年齢との兼ね合いもありますからね」

原嶋「兼ね合い、ですか……」

柳元「まず履歴書での書類審査が基本。書類で何が分かります？」

原嶋「（少し語気を強め）そうなんですよ。何が分かるんですか！」

柳元「（周りを気にする）」

原嶋「すみません」

柳元「（いえ、いえと手でやって）そう思われますよね」

原嶋「会って、話をしないと分からない事、見えない事ってあるじゃないですか。人間なんてその最たるものでしょ？確かに前職や経験は書類だけでもある程度分かるかも知れない。でも、違うでしょ？人間って、人の能力を知って違うでしょ？」

柳元「はい。違います」

原嶋「なんらなくて……書類審査で……厳正なる選考って……」

柳元「書類でわかること。氏名、住所、学歴、職歴、資格、性別……」

原嶋「……年齢……ですか？」

柳元「それで判断しているんです。それが」

美村「厳正なる選考の正体ですか……歳なんて誰だって取るじゃないですか」

野上「誰もが取るから、ある意味平等な基準じゃない？」

美村「……」

野上「全部は面接できないでしょ？私達の仕事はこれだけじゃないんだから」

美村「でも、この中にもうちで力を発揮できる人いると思いますよ」

野上「いるだろうね。今いる人間よりバリバリやれる人もいるかも知れない。

売上あげられる人もいるかもね」

美村「それなら……」

野上「美村。（ひと呼吸入れて）例えば、総務一人補充することになりました。求人をかけました。年齢を完全に無視して能力本位で選考しました。結果46のオジサンが入ってきました。その彼の指導にあなたが指名されました。どう？」

美村「……どうって」

野上「あんたその人に教えられる？社内ルールや業務内容、仕事の運び方、書類の書き方、その他もろもろ。先輩として、教えられる？命令できる？」

美村「……」

野上「今いるスタッフとのバランスがあるのよ。それに、ちょっと貸して（と、

封筒を貰い、その中から一つを選び中身を出す）この人、大学出てから約20年、電子部品メーカーの営業一筋。うちの営業部の連中よりキャリアもある。多分営業スキルも高い。でもこの人にうちの営業スタイルを今から覚えてもらうって出来ると思う？メール使って、ソーシャルメディア使って、B to BじゃなくてB to Cの営業よ」

美村「出来るかも知れないですよ」

野上「そうね、かも知れない。その可能性に月ウン十万はかけられない」

美村「若いからって、それは同じですよ」

野上「そうね『かもしれない』は同じ。でも、伸びシロの量は若い方があるし、コストも安く済む」

美村「コストですか」

野上「コスト」

原嶋「厳正ってなんですか？私を知った上で、その結果での不採用なら納得のしようもありますよ。面接してくれば、わかってもらえる。人生賭けているんです。命がかかっているんです。私だけじゃない。家族の……家族の人生なんです。背負っているのは家族の命なんですよ。柳元さん、わかるですよ？」

柳元「わかります。それでは、あなた……」

原嶋「原嶋です」

柳元「原嶋さん。20歳そこそこの……自分の子供と変わらない年頃の人間の元で働けます？先輩として教えを乞えますか？」

原嶋「できますよ。それこそ年齢じゃない」

柳元「原嶋さん。あなたが、今の若い世代をどう思っているか分からないですが、例えば『言葉使いがなっていない』とか『化粧が派手』とか『軟弱だ』とか思っていて、その人たちに教えを乞えますか？その人たちに○○さんと言えますか？その人たちに『柳元、コレやっておいて』と言われて『はい』と言えますか？」

原嶋「……できますよ。それこそ年齢じゃない」

柳元「それでは、手取りで20万そこそこの給料でやっていきますか？自分の子供と変わらない年の人間よりも少ない給料で、それでもあなたは働きたいと、働けると、言えますか？」

野上「『はい、大丈夫です。頑張ります』」

美村「はい？」

野上「面接すればそう言う。年下の先輩、上司。決して満足とは言えない給与。だけど、『はい、大丈夫です。頑張ります』って言う」

美村「でしようね」

野上「みんな必死な目をして、言うのよ。それがどんなに苦しい事かしっかり想像しないで、反射的に言うの」

原嶋「はい、大丈夫です。頑張ります」

柳元「……」

野上「そう言わせるのよ」

美村「……」

原嶋「そう言いますよ。言えますよ」

柳元「……」

野上「そんなの見たくない」

美村「……」

原嶋「それくらいなんですか。それくらいの事が、なんだって言うんですか。『はい、大丈夫です。頑張ります』言いますよ。それがなんだと言うんですか。そんなこと苦でも何でもないじゃないですか。なんでもないでしょ。面接すらしてもらえない今の私が……そんな事なんともないじゃないですか。ハローワーク行って、探して、紹介状貰って、書類書いて、送って、『厳正な選考の結果、今回はご希望には添う事はできませんでした』って……そんな私が……年下がなんですか。半分の給与がなんですか。『はい、大丈夫です。頑張ります』私は大人ですから。背負っているのですから」

柳元「……」

原嶋「そうでしょ、柳元さん」

柳元「……」

野上「『誰だって歳を取る』って、あなたの言った通りよね。みんな誰しも平等

に歳を取る。あなたも、私もいずれ書類選考で落とさせる歳になる。その時  
なったら思うんだろうね。』ふざけるな！雇用対策法を知らないのか！年齢差  
別は違法だ！』なんてことをさ。でも、今の私の仕事はそれをする事。送ら  
れてきた履歴書を35で機械的に仕分ける事。機械的に法律変えたって何も  
変わらないよ。何歳でもOK。能力次第みたいな顔していたって、腹の中で  
は35って明確な線が引かれている。腹の中をさらけ出してあげた方が誠実。  
例えばそれが辛い真実だとしたって、さらけ出す方が誠実。そう思いながら、  
機械でいる」

美村「……野上さん」

原嶋「志望動機の書き方がまずかったのか？自己PRが足りなかったのか？も  
っと、実績をアピールする実例を書くべきだったのか？履歴書が戻ってくる  
度に考えて、考えて、次の時は、書き直して、書き直して、そうやって来た。  
歳は誰だって取る。抗う事など出来ない。こんな思いをする為に今まで働い  
てきたわけではない」

柳元「雇用対策法の考え方は間違っているのではないんですがね。今のままでは表面  
的に整えて実態を見えなくしているだけだ。現実に対する手立てがなさ過ぎ  
る。誰の為のルールか分からない」

原嶋「……」

柳元「でも諦めないでください。社会人としての経験や人間性を重視する企業  
も皆無じゃありません。まだまだ本物の経営者はいます。私はそういう方々  
を少なからず知っています。希望は捨ててはいけません。原嶋さん。」

と、原嶋のカップを手にする。

柳元「お代わり飲みませんか。ごちそうしますよ」

と、自分のカップも持って席を立つ。

野上「先戻るわ。デスクに置いておこうか？」

と、手を出す。

美村「（やや間があって）いえ、自分で持っていきます」

と、封筒を力強く持つ。

野上「……そう」

と、席を立つ。

美村「野上さん」

野上「(黙ったまま美村を見る)」

美村「いえ、なんでもありません」

野上、タンブラーを手にして、

野上「美村。あなたの考え方、間違ってるよ。大事にしなさいよ」  
と、歩きだす。

原嶋の席を通る時に彼と目が合う野上。小さく、本当に小さくだが頭を下げる野上。

それに一瞬驚きを見せる原嶋だが、すぐに頭を下げ返す。が、その時はもうすでに野上はその場を去っていた。

彼女と入れ替わるように、柳元が戻って来る。手には2つのカップ。サイズは最も小さい。

柳元「飲んでください」

と、カップをテーブルに置き、自分も席に着く。

カップを両手で包むように持つ柳元。

柳元「(コーヒーに砂糖とミルクを入れながら)メニューに洒落た名前で書かれていようと、これはホットコーヒーです。変わってしまうものも多いが、変わらないものの多い。どちらがいいかなんて私にはわからないが、ホットコーヒーはホットコーヒーですよ」

原嶋「ありがとうございます。頂きます」

と、コーヒーを飲む。

原嶋「美味しい」

柳元「そうですか」

原嶋「ええ。(やや間があって)また頑張ってる書きます、履歴書。オヤジは背負っていますからね。」

柳元「ええ」

コーヒーを飲む二人。

封筒を見つめている美村。タンブラーを一口。そして一つの封筒の中身を取り出し、丁寧に視線を落とす。